

冷却遠心濃縮法

改訂日：2016年10月31日

検水 200~400 mL

冷却遠心 (5~25°C)

(6000 × g 10 min もしくは 3000 × g 30 min に相当する条件)

沈査

補 1) 回収率に大きく影響するため、再懸濁には注意を要する。

滅菌水を 2~4 mL 添加して再懸濁 (100 倍濃縮液)

補 2) 冷却水の場合は酸処理法を推奨する。

酸処理法

熱処理法

または

0.2 M HCl-KCl (pH 2.2) 溶液を濃縮液に対し等量添加

50°C で 20~30 分間加熱

室温で 4~20 分間おく

流水で冷却

補 3) 雑菌が著しく多く、再検査を行う場合等は前処理を併用することがある。併用の際は、熱処理→酸処理の順で行う。併用の場合の処理時間は、それぞれ単独の場合の処理時間を超えないこと。

酸処理法は 0.2 mL、熱処理法は 0.1 mL を選択培地に塗沫
コンラージ棒でソフトタッチを意識する

選択培地は GVPC 培地、WYO α 培地等があるが、雑菌の抑制能やレジオネラ属菌の発育能に違いが見られるため、目的に合った培地を用いる。

補 4) 必要に応じて非濃縮液 1 mL を用いて酸処理又は熱処理以降の操作を行う。

36±1°C で 6 日間以上培養

灰白色湿潤コロニー

[システイン要求の確認]
灰白色湿潤コロニーを釣菌

BCYE α 培地と血液寒天等のシステイン不含培地に移植

2 日培養

BCYE α 培地にのみ発育したものをレジオネラ属菌とする
(検出下限値は 10 CFU/100 mL となる)